

横芝の碑

(その四十九)

口碑に残る姥山の鬼塚

町史特寄篇の八頁、姥山の貝塚の項を読んで見ますと、九十九里沿岸屈指の大貝塚で、遠山地区北方台地の数ヶ所に点在し、次第に集結されたものもあるらしい。

等のが記されています。ここは昭和三十一年以来三回にわたって慶応大学の清水教授等によって発掘調査が行なわれ、その豊富な出土品から、この貝塚は今から二千年以上も前の縄文時代後期のもつと分り、我々の先住民の生活状況や推移を知るためには極めて貴重な存在として考古学界の脚光を浴び始めました。

しかし、文化財保護制度の貧弱さが原因なのでしょう、この附近の人々の多くは、貝塚のことでより台地の一隅に祭られている鬼塚の方がよく知っているようです。畑で働いているお婆さん等に、「貝塚を知っていますか」と尋ねますと「貝塚？しんねえな！鬼塚のことだっぺ」という返事が殆んどです。

鬼塚というのは、貝塚のある台地の北端にある混合樹林の中に在る高さ約二メートル、周囲四十メ

ートル余りの墳墓式の塚で、上には数本の巨木が陽差しを遮るよう繁茂し、その下には祠形の小さな石が淋しさを漂わす様に建っています。石には何処を調べて見ても何も刻まれていません。ただ地主の方が毎年正月に奉納するという注連縄だけが曰くあり気に飾られているのが何か真新しく目に映ります。

さて、この鬼塚について、この里の人々の間に、こんな話が伝えられています。

昔、東の国の悪者退治のためこの台地上陸された日本武命(やまとたけるのみこと)が辺りの景色に見とれておられますと、何処からか一匹の鬼が現れて命に刃向って来ました。命は初めは軽く相手をして退けていましたが、繰返して刃向って来ましたので命はとうとう本当に噴ってしまわれました。そして剣を抜かれ、一刀、二刀と攻め、三刀目を切りつけますとさすがの鬼も「これは叶わぬ」と台地の坂を転げるように逃げました。これを追った命は谷合で鬼に追付き「どうだ」といいながら

一突きで鬼を退治してしまいました。情深い命は近くの山に鬼を葬り、再び悪物退治に出発されたが、鬼を葬った山には、鬼の怨霊が残りに生えた草や木を切るに、必らず祟りがある、というので誰も近づく人がありませんでした。これについて、昭和の御代になつてからも「迷信だろう」と言つて塚の木を切つたり、枝を払つたりした人が、それぞれ病気になるたり負傷をしたりしてしまいましたので、「やはりさわらぬ神に祟りなし」と、今では誰も鬼塚の樹に刃物を当てないそうです。

それから、命が刀を三回振られた、という台地を里の人々は三刀(みたち)台と呼び、命が「どうだ」と言つて鬼を退治された、という辺りを道田(どうた)と呼んでいます。そして、この道田は、「どうだ」が変じたものである、ということですが、日本武命の伝説については袖ヶ浦の故事等沢山あつて、いろいろな武人の功績を一つにして日本武命という架空の英雄を造りあげたという説もありますが、姥山台地が横芝町で一番早く人が住み付いた場所であり、幾つかの集落が次第に一つになつたと推察されること、また、昔は強いという表現をも鬼と称したこと等を思い合わせますと、何も刻まれていない祠形

の石が、かえつて里の人々の口を借りて昔を語る碑となつているのかと、この伝説に限りない奥深さを感じるのです。写真は鬼塚の石祠です。周囲は樹木が生い繁り陽差しも届かない程の密林です。名も知らぬ雑草の葉が僅かの光りに反射しているのも不気味です。地主の方が奉納されたという注連縄がそのままに残つているのが見えています。(本稿取材に当り、遠山の小川文夫氏、姥山の伊藤正氏、同伊藤勝衛氏、各皆さんの御指導と御協力を戴きました。)

